

まえがき

二〇一一年三月一日、東日本を襲った巨大地震、そして続く大津波により多くの命が犠牲となった。死者何名、行方不明者何名という数字と瓦礫の山の裏には、地震の直前まで生活をしていた一人ひとりの生がある。阪神淡路大震災の時にはテレビの画面に、刻々と死者の数が増えていった。今回は、津波による甚大な被害が広範囲に及び、死者・行方不明者の把握が困難であった。むろん、数の問題ではない。すべてを失った、そのとてもない喪失感が重くのしかかってくる。未曾有の大災害、甚大な被害の前に、自然の猛威と人間の無力さを多くの人が感じたことだろう。

何かお役に立てないか、ほっとけない、居ても立って居られないと救援活動に動き出した人たちがいた。その中に宗教者もいた。被災地に物資をもって、救援活動にかけつけた宗教者たち。

宗教の社会貢献・利他主義を研究する者として、私も何かできないかと思案し、まずはインターネット上で動き出した。インターネット上に「宗教者災害救援ネットワーク」と「宗教者災害救援マッ

「プ」を研究仲間で立ち上げて運営し、「宗教者災害支援連絡会」にも設立当初から世話人の一人として関わった。学生をつれての被災地の聞き取り調査もした。が、しかし、私のしてきたことは後方支援の微々たる取り組みで、宗教者・宗教団体の救援・支援活動には敬服するばかりである。もう一五年以上も、そのような宗教者の聞き取り調査をしてきた。ロンドンで仏道修行に励むイギリス人女性は、「他人の声に耳を傾け、あらゆることに目を開き、自己中心性が薄れる。そういった要素により、人は目覚め、より利他的になる」と語っていた。宗教が人をより利他的にさせる、というのだ。東日本大震災での宗教者の取り組みに、そのような声が私の耳に蘇ってきた。今、宗教的利他主義として、一冊の本にまとめるべき時がきた。

日本社会は急激に変化している。二〇一〇年一月にNHKが「無縁社会」という特集番組を放映した。社会の中で人と人とのつながりが無く、人知れず死んでゆく孤独死も自殺者同様に年間三万人を超え社会問題化した。地縁、社縁、血縁という「絆」、「つながり」が弱まり、孤独を生きる社会となっている。

無縁社会の孤独な生は、他者をかえりみない生と重ね合わせだ。まさに、新自由主義や自己責任が喧伝される現代社会は、自分さえよければよいという利己主義の風潮が強い社会「だった」。……と過去形で書いているのは、今、日本社会が根本的に変わるといふ直感と、願いでもある。

内閣府の調査で二〇一〇年、現在の世相を「自分本位である」とみる日本人の割合が三八・九％に對して、「思いやりがある」とみる人は一二・四％だった。しかし、私は、この数字は大きく変わる

とみている。未曾有の大災害を前に、人々の中に眠っていた思いやり、お互いさまの感覚、共感する心が再生したと思う。

電通が震災後の四月に「震災一カ月後の生活者意識」調査を実施した。全国四七都道府県の二〇歳から六九歳の二〇〇〇名が調査対象だ。その調査報告のキャッチコピーが「震災で目覚めた利他的遺伝子」。そして、「静かに耐えながら、確かに強くなっている。心に備わっていた『助け合う本能』と綴っている。意識・行動の変化として、上記の調査結果から三点あげておこう。第一に、「自分第一主義から家族回帰へ」だ。地縁コミュニティの大切さを痛感する一方で、緊急時には守れる人に優先位を付けざるをえない中に、うわべだけの人間関係が淘汰され、本当に大切な人との絆を求める意識が高まると指摘している。第二点目は、「当たり前前から、ありがたみ・感謝へ」である。いままで、当たり前のように感じていたことに対して、ありがたみや感謝を感じ、一瞬一瞬を大切にしようという気持ち芽生えるようになるかと推測している。そして、第三点目は、「他人への依存から、主体・自律へ」だ。国や社会、周りのひとの誰かが何とかしてくれるという考え方では、何かあった時に対処できないことを知り、自分がやらなければいけない、できる人がやらなければいけない、という主体性・自律性の意識が高まると指摘している。利他的遺伝子が目覚めたというのは、あくまでも比喩だが、私たちの中に眠っている共感する心が目覚めたのであれば、希望が持てそうだ。

近年、欧米社会では、利他主義の動きが活発化している。社会学、心理学、哲学などの研究の世界で「利他主義」研究が盛んになっている。利他とは、他者の利益になる行動だ。電車で席を譲る、人

が物を落としたときに拾うなど、他者のために動いたことがない人は少ないだろう。東日本大震災では多くの人が被災地に義捐金や物資を送り、救援に駆けつけた。なぜ人間はこのような行動をするのか。どのようにして人は利他的になるのか。二〇世紀末からの研究は、利他性は社会生活によって学ぶことができるということを示している。そして、その原動力として宗教の力は強い。また、反貧困や自殺念慮者支援など、宗教者の社会的取り組みは広がりを見せている。一方で、東日本大震災では、犠牲者の廻向にと読経をしてまわる僧侶が公設の遺体仮安置所に入れないという事態も起きた。

今まで、宗教者は、どれほど地域社会に関わってきたのか。宗教法人に課税しろという声に、宗教者はどう答えられるのか。宗教者、宗教団体、宗教には公益性があるのか。社会に貢献しているのか。社会的現実を離れて存在しうるのか。

本書では、筆者のこれまでの研究をまとめ、近年盛んになってきている宗教の社会貢献、宗教NGO、宗教ボランティア、社会参加仏教などを、宗教的利他主義の観点から広く扱う。海外の事例研究も参照しながら現代社会における宗教のあり方を宗教者と社会に問いかけたい。

利他主義と宗教 目次

まえがき

第一章 東日本大震災と宗教 …………… 11

- 一 震災における宗教団体の動き 11
- 二 救援の拠点としての宗教施設 14
- 三 阪神淡路大震災からの変化 20
- 四 宗教者・学者の連携の動き 22
- 五 心のケアと共感する力 35

第二章 宗教的利他主義・社会貢献の可能性……………41

- 一 利他主義 41
- 二 宗教的利他主義 46
- 三 宗教の社会貢献の定義と分類 50
- 四 ソーシャル・キャピタルとしての宗教 54
- 五 社会参加仏教 58
- 六 宗教的利他主義・社会貢献への期待 59

第三章 宗教的利他主義の構造……………69

- 一 利他主義のフィールドワーク 69
- 二 JAとFWBOの社会的特性と価値観 74
- 三 利他主義の意味内容 76
- 四 利他的行動の動機 80
- 五 利他的精神の発達要因 85
- 六 シェアされるスピリチュアリティ 92

第四章 無自覚の宗教性と利他主義……………109

- 一 ソーシャル・キャピタルとしての宗教への期待 109
- 二 現代の日本社会 112
- 三 日本人の意識構造 115
- 四 日本人の宗教性 122
- 五 ソーシャル・キャピタルとしての無自覚の宗教性 125
- 六 利他主義への契機を含む無自覚の宗教性 128

第五章 宗教の社会貢献活動に関する文化・歴史的背景と法制度……………133

- 一 社会貢献活動に関する文化的・歴史的背景 133
- 二 社会貢献活動に関する制度と宗教団体 140
- 三 宗教団体の社会貢献活動と社会的基盤 143

四	宗教N G O	146
五	アメリカのチャリタブル・チヨイス	153

第六章 グローバル化とシェアすることの意味

一	現代都市の多民族的環境	163
二	多民族都市における信頼と憎悪	171
三	岐路に立つ多文化主義と市民社会	176
四	ハワイの宗教受容——現地化する灯籠流し	181

終章 宗教的利他主義のゆくえ

一	利他行ネットワーク	191
二	教団の社会的関わりと方向性	195
三	公共性と宗教	198
四	阪神淡路大震災から東日本大震災へ	200